

—スタッフ紹介—

役 職	スタッフ名
部 長	森山 あづさ
非常勤医師	倉田 宝保

—概要—

肺腫瘍内科では肺癌をはじめとする呼吸器(胸腔内)腫瘍疾患を専門に診療をおこなっている。

胸部異常陰影、肺腫瘍症例、胸腔内腫瘍に対する治療を中心に細胞障害性抗がん剤に加え、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤を使用し、慎重に効果と副作用の評価を行いながら診療を継続している。

関西医科大学附属病院の呼吸器腫瘍内科教授・倉田宝保医師が非常勤医師として勤務し、倉田医師は不定期ではあるが木曜日午前の外来を担当している。

水曜日午後のお大阪大学医学部からの非常勤医師は継続しており、院内紹介を中心に肺気腫、COPD、呼吸器感染症、アレルギー疾患、間質肺炎等幅広い呼吸器内科診療を行っている。

2022年4月1日から和歌山県立医科大学附属病院から呼吸器科・腫瘍内科から寺岡俊輔、高瀬衣里の医師2名が非常勤医師として外来を担当することとなった。

常勤医師としての気管支鏡指導医を継続し、気管支鏡を行ってきたが、昨年の近畿大学病院呼吸器科撤退に伴い、大学病院からの指導認定施設からは外れることとなった。

呼吸器内視鏡関連施設の維持を目指してはいるものの、近畿大学の撤退、医療スタッフの欠員に加え、院内協力体制の低下により、気管支鏡での生検による診断が自施設では困難な状態が続いている。来年度の施設認定更新からは外れる可能性が高く、既に学会へは報告済みである。

がん治療と並行して2018年から緩和ケアチームに参加し、看護局、薬剤科、栄養管理科、リハビリテーション技術科など多職種とのカンファレンス、および回診を施行。泌尿器科・射場医師、外科・市川医師がチームに参加することとなり、3年ぶりの自院開催したPEACE研修会では大きく役割を担って頂いた。

呼吸器外来(代診)、コロナ業務、救急外来等の重複のため緩和外来を一時休止し、院内からの紹介やチームでの回診時に合わせて病棟で診察を行うこととした。個々に情報を集め問題点を後で話し合う形式を昨年より継続している。

肺がんの化学療法は大きく変革しており、細胞障害性抗がん剤のみならず、がん細胞の異常増殖の原因となる、がん遺伝子そのものを標的とする分子標的薬、がん免疫サイクルと免疫逃避機構が解明されたことにより創薬された免疫チェックポイント阻害剤、そして血管新生阻害剤が開発されている。

2022年度には免疫チェックポイント阻害剤である抗PD-1抗体に細胞傷害性Tリンパ球抗原(CTLA-4)と併用した免疫重複治療、さらにそれに細胞障害性抗がん剤を加える臨床試験も効果が高いと報告された。多くの薬剤が開発され、その組み合わせで長期生存の報告も出されているが、頻度は高くないものの免疫特有の有害事象が発生し、治療に苦慮する症例も増えている。ステロイドのみでは対応不十分でステロイド以上の治療が求められている。

また、多くの治療選択肢がある中で明確な治療薬および組み合わせの効果の差が無い状態で、どのように治療内容を説明し、有害事象を検討した上で治療法を決定してゆくのか。患者側と医療者側が相互に話し合い、今説明できる最善のエビデンスを共有し、治療方針を決定してゆくShared decision making(共有意思決定)が肺がんの化学療法でも重要となってきている。

—実績—

2022年6月29日 泉佐野新池中学校  
“がん教育”WEB授業

2022年7月20日 看護エキスパートコース授業  
“がんとは(一般概論)”

2023年1月29日 緩和PEACE研修会  
3年ぶりの院内開催

2023年2月3日 泉佐野泉南医師会看護専門学校  
“肺癌の診断と治療”WEB授業

2022年度;  
肺癌および胸部異常陰影新患者数=157人  
緩和外来新規患者数=37名(入院新患を含む)

—来年度への抱負—

来年度は化学療法を中心とした癌診療に加え、休止している緩和外来を再開し、PEACE研修会も開催し、安定した緩和診療を行っていきたく願っている。

<施設認定、関連施設>

日本呼吸器関連施設

日本呼吸器内視鏡関連施設(気管支鏡)